

北海道 北竜町農協

〒078-25 北海道雨竜郡北竜町和36-3
☎01643-4-2211

農協組合長も、園芸地帯とコメ地帯でタイプが分かれるようだ。前者には営業センスを持ち合わせたタイプが多く出てくるようだが、後者はどちらかといえば行政追随型のタイプが多いように見受けられる。

その理由は果たして何だろうかと考えあぐねていると、コメ行政の特殊性に行き着くような気がした。つまり、コメには各種補助金があつて、営業センスのよいうな回りくどいことに力を入れるより、行政追随で補助金をパッチリとしとめた方が農協経営にプラスとソロバンをはじくからであろう。むしろ行政と喧嘩しては何のメリットもないので、余計に大人しいタイプの組合長が出てくる。そんな事情も働くのかもしれない。

北竜町農協の黄倉良二組合長は、どちらかといえば、前者のタイプに属する。コメ地帯の組合長には珍しいタイプであ

な貴祿だ。

それもそのはず。黄倉組合長のルーツを聞けば、大阪ということだ。曾祖父が大阪のコメ屋さんで奉公をしていて、一念発起をして北海道への入植に参加したという。もう百年近くも前のことである。黄倉組合長の言葉からは、大阪弁こそ聞かれないが、浪速商人の血が脈々とつがれているようだ。

余談だが最良の野球チームも、阪神タイガースである。12年前に優勝した時のウィスキーを未だにしつかりと持っているとのことだ。

▽農水にも積極発言

北竜町はJR函館本線滝川駅から真北へ車で約40分。空知平野のグッと奥まった所にある。一つ山(暑寒岳別連峰恵岳)を越せばかつてのニシン漁の本場、増毛町がある。日本海を越えてやってくるシベリアから吹いてくる冷たい風は、その恵岳岳がブロック。冬には冷たい風が雪に変わり、それがコメ作りに欠かせない水となる。夏には気温をグッと上昇させてくれる。コメ作りの適地になっている。

この山がなければ、北竜町ではコメは作れず、畑作の適地になっていた。その意味で、暑寒岳別連峰は北竜町にとつては母なる山のような存在だ。黄倉組合長がそう説明してくれた。

組合員農家は356戸。その大半はコメ専業農家である。経営規模は10ha前後。最近では規模10ha以上の大規模農家が出てきた。大規模経営農家が多い分、今回のコメ暴落はずしんときいた。町の経済にも悪影響を与えている。

黄倉組合長によれば、10ha農家で約250万円分の収入ダウンにつながったという。そういえば町の飲み屋も客が激減。北海道庁の堀達也知事が、非常事態宣言を発するぐらいの危機的状況にあるというのだ。

これには黄倉組合長も頭を痛める。コメ下落は政府の無策が最大の原因と、事あるごとに政府のコメ行政を批判してきた。

出色の営業センスで独自販売を 行い生産者にフィードバック

良い農協は「こ」が違う！
エグゼレント農協探訪記
18



農業評論家
土門 剛

どもん たけし/1947年大阪生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。「省益に走った農水官僚の100日」(中央公論94年3月)、「食管死守で焼け太る農水官僚」(This is 読売94年3月)、「懸案見送られた食管改革」(同94年7月)、「食管制度のあり方に関する調査懇談会」(エコノミスト94年8月)など、農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆。主な著書に、94年1月「農林中金の憂鬱」(日経ファイナンシャル94)、93年10月「市場開放決断の日」(日本経済新聞)、92年11月「農協が倒産する日」(東洋経済新報社)、「穀物メジャー」(共著/家の光協会)、「東京をどうする、日本をどうする」(通産省八幡和男氏と共著/講談社)、「新食糧法で日本のお米はこう変わる」(東洋経済新報社)など。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。

る。東京や大阪の消費地へ営業活動にドンドン出かければ、新しいものに果敢にチャレンジする。風貌も、田舎のオッサンのイメージではない。背広にネクタイをピンッときめた商社の営業担当重役を思わせるよう



黄倉良二組合長

道内農協組合長の懇談会があった。黄倉組合長もこれに出席。今度のコメ所得保険制度に注文をつけてきたという。

「国は、新農政で農家の数を減らし、大規模専業農家にコメ作りの大半を担わせると大胆な

政策を打ち出してきたが、政府はそのためにどんな対策を講じてくれましたか。ただ2000年には農家の数は減らします。大規模農家に集約します。スローガンだけ掲げて中身のある政策はなにも伴わなかった。安全な食糧を生産する意欲ある担い手対策がなにもないんだね」

鋭い質問のようだった。これには国の役人も反論できなかったという。黄倉組合長はやはり土の人である。組合長室のカベには「天と地と水」の額がかかっている。農民の心が今も失われていない。

▽消費地にトップセールス

コメのセールス活動は、黄倉組合長がもっとも得意とする領域である。マクロの農業論議で積極発言しながら、コメ販売というミクロの分野でも他の農協とは違う路線をただただ愚直に歩んできたような印象を受ける。

消費地にトップ・セールスをかける。関東圏から九州まで北竜町米の売り込み

にはとても熱心だ。道外への出張頻度は道内245農協の組合長の中でダントツ。月一回のペースで消費地に出かける。97年だけでも12回は出張してきたという。10月に全国農協大会が開かれた折にも、大会が追われればさっさと得意先回りだ。

北竜町農協の名前は、関東、中京、京阪神圏のコメ屋によく知られている。冷涼な気候をフルに使った有機米の生産で、こだわりのコメを扱うコメ卸や小売に人気があるのだ。黄倉組合長のトップセールスを支えるのが営農部の藤崎正雄部長だ。組合長の方針に沿ってコメ農家との接点役を務める。最近ではコメ農家の風圧も強くなってきた。藤崎部長は何かと頭を痛めることがあるが、そこは真正面から対応、農家の信頼をガッチリ得ている。

その北竜町農協は年間19万俵を集荷する。うち17万俵はホクレンに販売委託。残り2万俵が独自ルートでの販売となる。わずかこれっぽちの米販売に北竜町農協は力を入れている。一見して無駄な取り組みのように見える。実際に道内の組合長からはやつかみを込めてそう非難する声もないではない。独自販売は系統コメ販売の秩序を崩すことになるのではないか。そんな考え方のようだ。そんなことには黄倉組合長は一向に意を介さない。

「独自販売に力を入れるのは、何も系統のコメ流通をぶち壊すためにやっているのではないんだ。農協も、農家から大事なコメという商品を預かっている以上、農家が満足するようなコメの売り方をし

なければならぬだよ。世の中、何でもビッグバンだろう。コメ流通が大激変しても、組合員の利益を守るために独自販売も必要になるんだな。それに流通の末端とネットワークを持つことは、生産現場にもフィードバックできるメリットも期待できるんだ」

当然、ホクレンとぎくしゃくすることもあるが、黄倉組合長の頭の中にあるのは、コメ専業農家をいかに守るかしかないのだ。このポイントを外せば農協組合長は失格だとまで言い切るのだ。

経済連や全農は量売るのには適した組織かもしれないが、毛細血管のような流通分野には弱い。その毛細血管のような所を攻めて北竜町のコメを売りまくる。これが戦略のようだ。



「天と地と水」：黄倉組合長の農業に対する姿勢がうかがえる

「食糧庁による新米と古米の逆転販売から始まった97年産の米価暴落は、国にとってみれば、コメ行政の大転換を図る証かもしれないが、コメ政策が何かちぐはぐな気がしてならないね。新農政や新食糧法が目指す一百万円基軸の米価を実現する宣言だと受けとめていたが、今回、食糧庁が仕掛けた米価暴落は、その第一歩だと思っね」

「政府が、国際化路線で一百万円基軸の米価の実現がどうしても必要というのなら、それに相応しい条件をつくって欲しいね。農機具、農薬、肥料、燃料油など農業資材の価格は、国際価格の何倍かね。これを下げないで米価だけを下げるとい

うのは、無理な話だと思っね」

とにかく黄倉組合長は勉強熱心だ。新農政プランのことについても熟知している。資料もよく読んでいる。筆者のように農協界には罰点マークがついた論者の本にも目を通す。勉強量では道内、いや全国でもトップクラスだと思っね。

筆者がインタビュに訪れた前日に、札幌で開かれた農水省農産園芸局幹部と